

メンタルヘルス担当者のメンタルヘルス 木島丈雄

ドアがノックされた。

「どうぞ」

私は鷹揚に返事した。

私は社長室への入室をフリーにしている。社長室は社員全員に開かれている。わが社のモットーだ。

「ご指導をいただきに上がりました」

総務課の係長だった。私は彼を社員のメンタルヘルスの担当に指定している。

社長室に入って来たものの、私の机に近づいて来ずに入口付近にたたずんだままだ。

「うん？」

ちよっと声をかけただけで、係長の身体がびくと震えた。

おどおどしている。あきらかに私におびえている。

変な匂いがした。緊張のあまり発している冷汗の匂い。

胃が荒れているんだろう、嫌な口臭。

こいつは私をイラつかせる。

「なんなんだい？ こっちに寄りなさい」

努めて優しい口調で言った。

ギクシャクした歩き方で係長が近づいてきた。

私の机の前に立ち、うやうやしく頭を下げた。

「社員のメンタルヘルス維持・増進につきまして、ご指導をお願いいたします」

書類をはさんだバインダーを、賞状を授与するような手つきで私の机上に差し出した。手が震えている。

『社員のメンタルヘルス維持・増進のための基本方針』と書いてある。

先日私がやり直しを命じたものだ。

私は文面に目を落とした。

「なになに、『上司による適時・適切な指導』だと?」

私は頭に血が上った。

「おまえは、私が社員の一人一人を愛し、いとおしく思っている気持ちが、まるでわかっていないんだな……」

「……」

「この前言っただろう。こんなふうになから目線で言うんじゃないくて、社員目線で作り変えろ、と……」

係長の顔色がみるみる青ざめていく。

「何度言ったらわかるんだ!」

「……」

埒があかない。

「俺の気持ちを言うとしたら、『心に不安を感じていらつしやる社員のみなさまに優しい言葉をおかけし、不安な気持ちを和らげていただく』だろうが。この馬鹿!」
係長が、携えていたノートを拡げてあわてて私の言葉をメモしようとするが、両手とも震えているので、ノートをとり落としそうになっている。

「なんだ、なんだ。この野郎。俺がそんなに怖いのか! もういつペン言ってるから、ちゃんとメモしろ!

『いやしくも上司たるものは、社員の方々お一人お一人のお気持ちに寄り添い、人格を尊重し、肉親の情愛を

持って、わが子、わが孫のように慈しみ、愛情を持ってお育てする』だ。このかかし野郎!」

係長は膝をがくがくさせ、壊れたロボットみたいな動きで社長室を出て行った。

私はちよつと考えて、社長室の脇にある秘書室に声をかけた。

「みーちゃん、ちよつと来てくれない?」

正式には社長秘書の山中美佳君なんだが、私はみーちゃんと呼んでいる。

みーちゃんが社長室に入ってきた。

「なあに?」

その声を聞いただけで、私は背中がぞくぞくこそばゆくなつて、なにも考えられなくなる。

「あのさあ、さつき出て行った係長の後をつけてほしいんだ」

「えっ、なんで?」

「ちよつと難しいことをお願いしたんで、気に病んでいないかと思つて……。なにか変なそぶりをみせたら押しとどめて、優しく慰めてやってほしいんだ」

みーちゃんが微笑んだ。

「まあ、社長、優しい」

実際に、ほとんどの社員に対して私は優しい。
あいつを除いて。

私はあいつに対する腹立ちを我慢しない。腹が立つのを我慢することはメンタルヘルス上よくないから。

しかし、あいつを死なすわけにはいかない。

私のメンタルヘルスのために、あいつが必要なのだ。